

新選百物語卷四

○鉄炮の響にまゐる攝師と命

年ふれの名不古跡を市中にゆくあまのつとをき  
りのせうし子一の霰松原も今へ人家をらきき  
て安之町と叫び針業多し人番敷など高み  
ふまぬ多りされども回舎此牛されに尻袴口の  
岡居共なく物事のなるをさうし今いひしけり  
立回し至篤と云尼庵居して貞孝と云やまふ  
るは場もあつたふも貞孝と連れく夜陸の及  
いてぬも牛も多しをさうし或とも至篤をさう

新選百物語

年久しく譲りておしれと場石津急な後居  
てうされをけ老人急病のうり昔分れの至篤  
面をを多れ移みと云れ元氣をさうやくゆが  
ようにぬらう其夜の至篤を滞留してあまの  
い着病いけまど業かかとすいびぐり聖胡印の  
色りなれを縁敷つまも集りて蘇送など執り  
玉等たのめけふよ一七日滞留まりて信念佛  
とて尸をさうしをさうすの形ひされにさまを  
念佛して八日りの夜子れおし貞孝と連れ

ある場の北の口を名お系にひきかへりてくともひき  
あふれかく夢のよりに歩へ抱きて十日後の  
しりしが月を西へ落しつゝさうに雨風の  
後され師娘もに不審不審の月影をさう  
てくれに二十歳わまるくゆりき女は腰を下  
りてまゝぬが髪とろり赤子とて乳を至篤のま  
にのゆりよる至篤もかく深更の女の一人様を  
ふいたるもさう思ふさう迎へてく僕によ  
ら此處のいふ事されともさうに後て  
ア、ア、二人の中をさうさう抱きて

新選百物語四

月をゆりて返るもせむしなす貞学の十條さ  
一仏不礼の念佛にたれを被女らのひきかへりて  
さうに後中よあやがたに抱きてさうに思  
いさうぬきと恨くふ遠ざりゆりてさう  
あつたれが至篤貞学あ人のつぎに庵にさう  
貞学とていふ今夜の女はぬきさうにさう  
彼が赤子と抱きさうにさうのさうにさう  
も心のつぎにさうの口でさうにさうと恨  
其のちい紀別泉の河原のつぎ、月く復身の語  
ふいつくさうに夜中にさうにさうにさう



まは妻にけるげさくさくは親類まの秘んご  
身人をふのそあわれもねがご交小智あま  
大和格の雲にあろくつの森れりくろ古塚と  
ま一穴ありその中にろとく屍多く積あ  
乃り諸人これそけ年月あろ人の屍うに狐狸  
のふろかえ一けま金の後くは往來も絶  
と番人をつ番金一が或は往來番人ろ一けん  
ま二つまはそれちるくろり死をを度忍ま  
又人もまくなをれ時より門戸をまきて夜分の  
往來まをれがゆそへ諸人のまろいさほ一歩一

新編百物語四

急病あふ所のその外のさほげられの権師をや  
いて討とく一とわを近き権師  
まのしあさたバチあてぬまと一問小  
まの権師ハアをれまうと目れ雲かまを鉄  
炮びけ被殺者の有森ま石和格まを毎夜  
く往つぬつ見えれもあろままをまをま  
物う一秋のまつと雨まがま風まを鳥虫の音  
のつとあまは心ままをまろく人本陰にまを  
まをい小唄まを茶原まをまをまのまをま  
まの権師はまをまをまをまをまをまをまを



よくこれに法師の首まきとていじり此と候らつ  
て家獵師へすじも念まはるるを少少そのりん  
や銃炮をて火繩をとまみ少とんとすつを  
思ひもよめ後より兩足はくんで虚空に上  
まねといくらど所方きく今を密約と親敵  
たつた何ともせん子も是銃炮をけり変化  
い失て二回あまも扱せられ忽ち絶へた  
御人くこれを見つてあまをいふと  
彦中れ朱もをりくひれり而の世もい  
ゆれいついせんと業いふいふの世もい

新選百物語四

閑居して貴き傳のわりをとりて  
を放すははくしの供物番とて好怪な  
の法と候なりこれにあらはれぬと何の  
不為とよまてあまをいふと

○我身とやろをと劍術の師

男子の陽をまらして勇猛なりと  
多しして多しこれも前後の  
さうてなをちかるといふと  
思ふときた前後をまらして  
思ふときた前後をまらして  
思ふときた前後をまらして

今いむり馬田主水と又人ありお羽の團れ巻ま  
りくろあき内より京朝小居候し男子一人他は  
主税と名づけ赤松家に仕官せしが二十三年又  
主水の十日をうそ血を吐われの家内此井らき大  
町と名づく候くと書生すまども終らぬも内室  
夜益位くし目もあてられぬ有候されもかくても  
果あまさればいと候んごふ小藝送りまも内室を  
繋ぎ切て一間の中に臥せりてあまはくと書  
まこいこ色に死んどなきされば一門中を離  
ははく教訓をまぐと免婢とて家ぶつてつ

新選百物語四

傍をさまま反隠し番一年をうり送りて送さ  
るもの目くくに疎しと志ふ小生た何とまま  
湯あがり此落化候そろまげの掾警しゆく  
銀のむすしお香れ葉と緋の三のいの草  
履織製の浅耳草切毎巻入の巻を白繪  
の扇子に香の玉帯の下小紙折をまま丸と  
まそる腰つきの歩りやうえまといわたり子左殿  
かまゆくとと駱ぬ姿存理了を戎川の懸る町  
に南川丹彦とて劍術指南の浪人あり主税が武  
藝の師兼とて主水在世の討うも内外の福





さしほのしりしと厚ううしぐ色いんのすしりく  
その比ぬるさかき井免し子代えと勢るさめを  
非くけて象しじと物いとおめて思ひ森れけむり  
あき月此すやまゝに思ひハ十寸穂のてき穂小あ  
りく世間も神の主人税の武士の捨る勢う一は  
を歩はくく塩ひて謀てこれごと馬此身小馬  
いそ石水とせむかおと病印も歩ははら  
もこのまが急小あて金小あるとい思ひをよるを  
これをもせしぞあま急の一人もや  
か口よと知しと婢小氣松まへしりそい知れ

新選石物語四

引とせし急ひて凡んとい思ひとこ主税の穂と世  
お秘の急ひんやうとかなりし折ふし主税の面  
に用あり主命をれば是此及をば十日をかり  
返留せしに急をさるとの丹急とありし今せ  
婢さよと去急まつきり丹急松とま急の一人急  
急さ人いかれえとあむ世間へとくう急名を流し  
一門前も入く毎日此急見見急月が口より急  
を急より日ま急やう急急急急急急急急急急急  
もかく急急急急急急急急急急急急急急急急  
おまは急急急急急急急急急急急急急急急急



何の世間へ偷まらう 如少くもよりの世に這みかりぬ  
おれ有ま家の牛あ親と擧げ文めとよを捕へく  
孫に引寄つて孫バウツてやふくと積るる物  
頭もまた井の西の一帯うさばが女れ子のうら  
分いクトをわたり息をわれを俄め井らうさ茶とあこ  
へ影み水たれた抱へ替ふくと呼吸せられどよの甲斐  
みられバ大いあされゆしてな色あくくあし死教え  
ふけ忍くくろと弟の色を忽め何氣れなくを  
新丹蔞小物と知をば強氣れ丹蔞むつうせ  
まをうく名案一極くあま 丹蔞代くいされまふ

所選百物語四

嗚呼と境を好まらうそれまゝいふそのおと必と  
おにわいあなとつひや死ても女氣れおみ入や  
しんがと庭氣味ありて起つ唐つ今やくと穢おふ  
おそれ境の歩ゆる小ぞ丹蔞の衣巻とわへ紐の袷  
大振長あび入く死體とよせきか桂とやあみ  
のこれ巻と巻本一巻あて巻紙みよと包と扇み  
あぢく後巻みむくひ明日己れ刻にとる比おしく  
にまあふべ一巻さとおし巻もあしとさや  
てしんととさくおて新後室の門此戸のわゆるけ  
女一いんまのまれとたいぞれとまを罪とあひ



戀してたがやを頼もせぬ頼もせぬ口と人共  
もれとけ足まけ井さか深あついまくまがの  
袖をかくさんてよしの殺せし其さうこそろの  
思ひあきせんと思ゆる教をのどく志願をわめて  
あみあきけとどく秀たれを後室にいんがよ  
もろもた終入一ヶ幣あまてよめつ。まどろみ  
とほろの夜さわり己れ却すた人を重ひかゝる  
寄へ急みけういー<sup>ま</sup>白ハッ色いも後を移るん親も  
と人相儀まをも一紙ぐさ布てぬとこの期をしく小  
娘んと終まへ今まをを候もかへ用てをい

掃くでいひひかひめてとよの世々くおいて  
不意に折し色東河原に女の死んでと付茶此  
うにた直親の縁より訂さる地して使ともく川  
原にりこれお娘の井まが死骸あまりのあされ  
位よ色位まはる後しくせんきあけまも井まが  
運のつさうらや殺れ換となり初て直親と人  
葬送しく後移へるふ吊ひたるよ此矢のともや  
六年の月日なら考し色新夏に夜又至親の家  
へ数年此れ入宮喜名の覺平とく酒どけの付氣  
この一本とみんのけ糸を終る管紙母提とられ

若き如身の供とを速とこれのたいて遊べば  
多し我も死する事よ覚平大も作玉一  
いなり我も一ちとさかろや ぞとく死のれい  
さへに怒りの教をわてこれ心とよけ年月うを  
あさんと思へともと校秋も運も登任バヤと  
ゆせ一とや月を運のを限るあれん遊身サハ  
知くとと一とつみ夢斗かろるに夕へ涙ハ消て流  
もか一覚平ハ醉さ免て惘然くえと一か差  
かくと人を差少をわくと人ハ語れども  
我知りあひ愛りてやその身も過切て考の氣

新選百物語四

色の花とらうと税ハあふさるわきて城之控  
花下ハに終日の酒熱酔してと控れぬよ  
ゆり乃れとく脚さるしに辰れおれぬも  
税ハ藤岡とるおされハ後家ハ不意一移て  
腹十文字ぬかき切て吐てさ色一死なれハ後家ハ  
さうとて因章さつぎ丹莖く大知れバ丹莖  
にも知せの人使くはくいかりらるやうす  
り若くはとも丹莖今更優小て肩さるる  
果一と若れハ後家か乃れ人ハ何あへるつと  
もあくとわりにられる二人が未だ天四封一解り



むくみ多くをみくみ貧窮されを京の侍屋  
とあるいざ一衣のまのも夢代ま一淀境に小庭  
と建まひまろり書せし八月れり老つる縁の  
風雨洪水してならまら恨まれをれ後玉が小庭  
もつと流され水も替れて苦痛の家寂実まろり  
庵しくと怒のた老人を殺し一母まけ罪あま  
と責まぬふ影を少小付懐ひまの色の及とを  
○鶴の嘴とるに花宣  
荒の社みよつてまると今のひく伊豫の團江  
野村くやしくみ天玉の仕くつてつづれ叢祠の

新選百物語四

ありけるが毎白鳥共ふ方まかくお礼の茶夜ふ  
は長村のつた及むとをまると酒菓魚鳥その外  
種々の供物を献トまれば初まをの神樂を奏し  
神意をましり奉りまの初色れを福宣氏ふ  
とる今あを神明の沖お祝をとつて社あり  
長村依村の老ももまぞおね一同より連てまこ  
たれふと逃ままばあとい虫の考ぬをん少へおさび  
しくも更とる勢しくありて社壇の四す耐まろり  
吟詠しまもま河まりて書もあし卯五月未明り  
氏子も今もも神領の御機嫌よりしくお現







ありしと悦びあひて移てこれを見小借し酒  
さゆ女しを疎く日本具さる微塵もめて碎け  
らる斯やしき米穀の米その後の此あり  
乞圖を乞して男女みゆは八九才をかりたる  
思を人神供なてまれば神もみずる宗りとま  
さんし神託宣ありしとて人神供と母さひもこの  
農民もまぢ忍れ今この難ハ誰の思ふと親る  
まの心れをさ家業の耕作とてされて日ぬる  
げさうやせが中かそそ是あり親ハ近國の縁を  
苦みにつりあひいまして上方みまどりて奉る

新選百物語四

みあさんと少と其まなを自新 采農民も大  
怒と今この内誰あつて思を思らぬものあふばや  
一人あても化虫へおとす堅くそ来とこれ色に  
け企とせひかくやとてた後今も斗なりがえや  
まもさら林を例れとて神身は儂し一息  
鳥さるも種くの敵物まんづく神託の人神供  
を敵とて迎在を神これ一果何日吾日  
かれを神禱とて寤どりとて思をり親の泣まのつ  
と神託のまらればかきとて今般の人神供の  
のうくと神の足へ一まられば侍ふ命あふ

かゝると後かきよに集りて後新きよの秘伝  
とせげ三方の圖をちあれは、是も教色とて  
く神ももるゝとて、その載せりて、寤の中、小  
作とて、とて書きたる人、世の事、あり、取、わ、さ  
く、く、神、の、若、く、は、我、を、う、く、と、あ、ふ、と、さ、く  
く、と、と、あ、せ、り、た、友、と、は、先、後、く、不、圖、を、取、て、  
初、ま、き、一、本、の、野、村、の、平、と、も、極、貧、窮、の、者、  
あり、一、が、ま、う、れ、田、地、と、命、と、つ、た、一、人、の、母、を、  
ま、り、て、世、の、あ、き、さ、く、く、せ、も、生、得、律、氣、一、編  
に、讀、め、さ、き、の、か、れ、が、人、を、れ、を、あ、ま、り、つ、り、つ、り、

新選百物語

なる、因、果、の、む、く、ひ、や、天、女、を、地、も、も、一、人、哭、の、は、な、  
助、み、圖、あ、れ、が、よ、ろ、の、親、の、叔、氣、の、ど、く、脚、を、之、  
後、か、き、一、之、は、神、と、膝、と、の、せ、我、不、幸、に、て、寤、ま、  
あ、れ、り、これ、も、世、の、む、く、ひ、に、て、定、ま、る、事、と、い、  
ふ、と、は、次、身、ふ、つ、る、事、に、あ、れ、が、世、の、あ、の、之、愛、此、間、  
と、長、く、この、あ、ら、が、あ、せ、神、を、ひ、へ、と、神、の、さ、く、け、  
と、長、く、と、書、せ、り、一、昔、昔、と、せ、り、か、く、と、ま、り、つ、つ、と、  
と、知、る、を、と、り、成人、と、て、これ、と、授、つ、と、ま、り、つ、つ、と、  
し、に、神、の、あ、く、殺、え、り、神、の、氏、子、と、ま、り、つ、つ、と、  
加、護、擁、護、と、ま、り、つ、つ、と、ま、り、つ、つ、と、は、供、と、い、つ、



かる神の海をろろそ汝今般の神少小一命と  
死んでくれ汝がまさ慈とあつてとくに殺しも逃  
げんと強さうじし泣あつて既んその日に必一ふ  
沐浴く力と清め養ふとまねと泣きむあつた  
その日に昼より社の後二丈好のねれ木のま  
ろくに朽や鶴の枝と葉をくひ朝鶴とやまひ  
一ふ下よまその長二丈とあふき蜘蛛朝露を自  
にち布くかのねれ木をまのち農民もこれと  
見てあまふくとふ中ふやまき鳥の巢小く

新選百物語

はく蝮蛇の毒のまじを忘れぬ蜘蛛を喰し見  
て目まきもせど少くつけとやその向まは  
かり一間たすくと尺へたる雌雄の毒ハ一時り  
嘴あつて一羽をりて蜘蛛の頸れと嘴まろ  
一とあまは一羽れ毒もまき死入り入久くあつ  
ふにぞ蜘蛛くらまら解丹をば毒もそのまき死  
さかり蜘蛛のわざとの下よ腹とあつて差れど  
ならとらふ引裂殺一とらめの巢に海をく  
ふまを見あつすまよや叩ふまらと目れまふ  
尺つらまよとまのて産友へかくとほ布をれ

近近在在を飾飾すつて又又戒戒をしくとす。アハハ、それ  
をさしたるを、善善す、すつと、辨辨蛇蛇の引引たり、血血の菜菜の  
を、を、初初て、け、は、社社の、け、れ、と、お、れ、入入辨辨蛇蛇と  
と、す、て、ま、を、社社酒酒な、で、ま、の、里里、香香と、た、清清、先先、乃  
社社樂樂と、奏奏、一一、々々、矣矣、秋秋の、日日、此此、あ、ら、う、い、と、を、行行、さ、く  
ま、ら、に、ち、の、き、た、れ、と、社社、あ、ら、う、草草、薦薦、一一、き、淨淨、脚脚  
み、の、淨淨、衣衣、を、着着、せ、人人、は、供供、と、て、な、て、ま、つ、れ、ば、や、う、り、此  
親親、い、つ、く、及及、び、を、さ、ら、う、人人、社社、を、さ、ち、り、一一、か、音音、よ、う、と、ま  
賜賜、ふ、委委、礼礼の、ま、此此、却却、と、り、い、ら、の、あ、ら、う、と、ま、つ、れ、  
限限、を、と、り、な、ら、う、や、ま、我我、さ、た、お、と、懸懸、ち、う、て、社社、内内

新選百物語

十日

初初め、そ、と、あ、ら、ま、れ、を、農農、民民、の、あ、ら、う、く、社社、を、さ、ら、う、こ  
に、つ、ど、い、う、を、再再、と、と、備備、へ、て、社社、壇壇、の、う、う、と、今今、や  
く、と、さ、つ、け、れ、な、も、ね、お、く、風風、の、考考、の、ま、ま、さ、い、な、さ、な、  
今今、夜夜、の、人人、は、供供、と、つ、て、社社、樂樂、に、お、ま、い、ら、そ、と、夜夜、の  
あ、け、ま、ら、う、飯飯、結結、み、て、つ、ま、も、い、と、ま、い、社社、内内、に、け、り、  
社社、の、ゆ、の、あ、ら、草草、薦薦、み、つ、社社、を、さ、ち、り、階階、て、ま、さ、く、井井、を、さ、  
か、た、ら、酒酒、葉葉、急急、考考、か、ら、と、換換、え、ら、う、ま、つ、ま、け、ま、い、は  
あ、親親、の、懐懐、び、て、云云、を、換換、一一、地地、と、禮禮、一一、淨淨、脚脚、と、い、た  
ら、う、社社、を、不不、定定、ぬ、一一、淨淨、脚脚、と、音音、此此、ま、ま、と、お、ま、い、ら、  
す、一一、の、間間、の、あ、ら、う、一一、つ、つ、の、ま、に、ら、い、存存、さ、ら、う、と、語



まは入く心子こころこ極たぎいれまで供物くわつとより酒さ  
あそつひひももかか病びやうくく殺ころたれたれ一いっ辨べん呪じゆれれ  
かすべべ一いっ毎まい子の託たく意いももこれまで年としを辨べん呪じゆれ  
を辨べん呪じゆれれのみ入いりり人ひとは供くわとより免めん酒しゆ菓かを  
くくひ氏うぢ又またれ命いのちを敵たぐひ一いっ半はん辨べん呪じゆれれををか  
りり一いっままにに半はん辨べん呪じゆれれをを感かんトト辨べん呪じゆれれををか  
りり一いっ命いのちと敵たぐひををああくく遠とほいいちちとと辨べん呪じゆれれ  
本もとと切きりけ菓かををほほええ焼やくくとと一いっままにに氏うぢ子こととい  
ぬぬ一いっかかとと一いっままにに死しににつつとと未ま世せはは辨べん呪じゆれれ  
とと一いっ氏うぢ子こをを擁よう護ご一いっああままいいりりへへ今いまと

新選百物語

相あ母ははれれトトああままいいりりにに殺ころすす半はん分ぶんをを是こゝとと一いっままにに海うみの  
舟ふねをを降くだししけけふ

新選百物語卷四終